

概説

我が国において、がんは死因の第一位であり、米国でも心臓病に次ぐ死因として上位の疾患である。がんはその患者数と治療が「民族性」「生活習慣」「医療制度」により差異があることが知られており、国や地域差につ

いて比較することは様々な議論を呼ぶ意義があると考えられる。

本稿では、日米の主要疾患の患者数とがん患者数の比較、またがん種別の患者数や治療している医師の違いに

ついて、大規模な医師調査データ^{*1}を用い分析を行った。

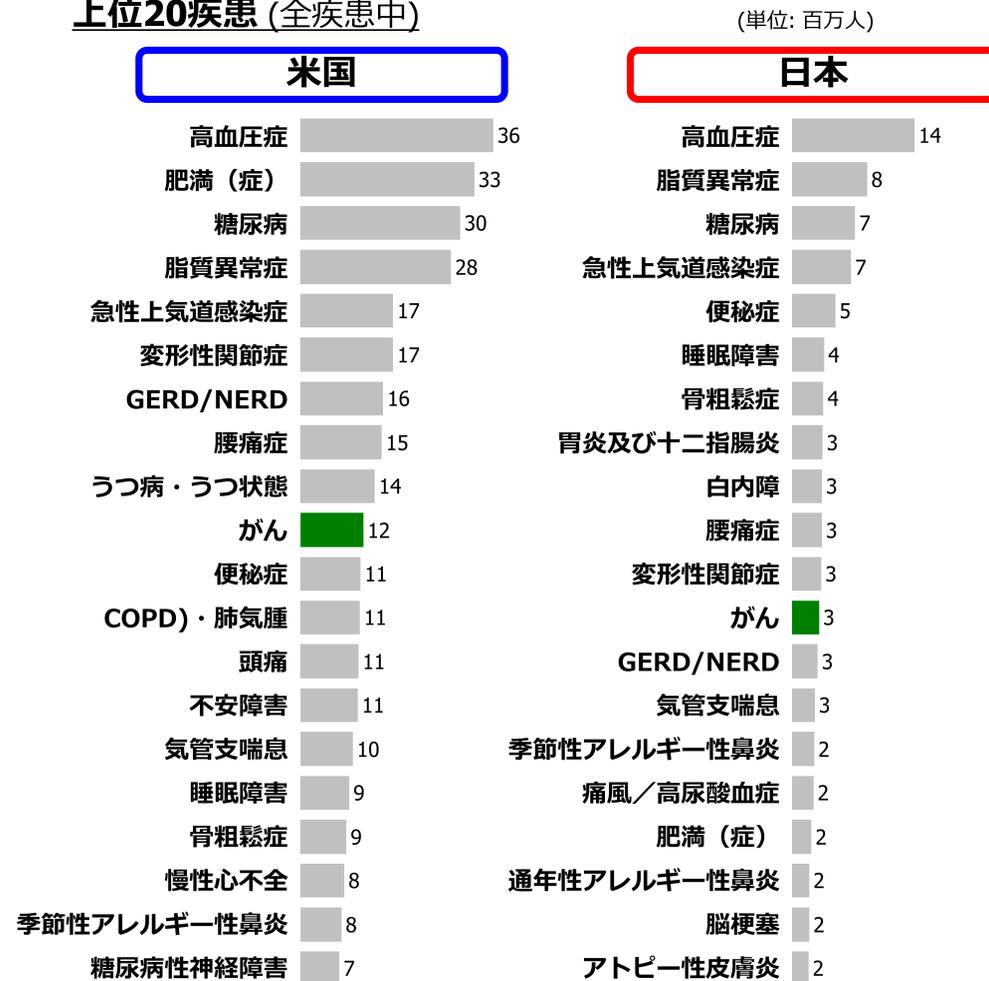
がん患者数

調査対象400疾患の患者数を比較すると、がんは米国で10番目に、日本では12番目に患者数の多い疾患であった。また、調査対象となった全40がん種中、患者数の多い上位15がん種ががん全体の80-90%を占めた。

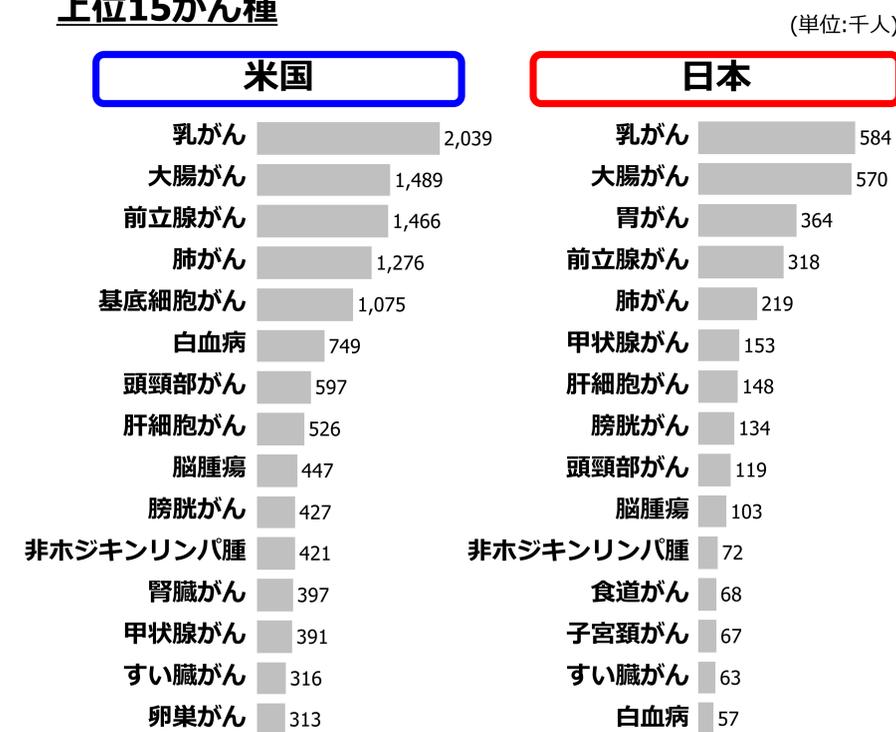
上位15がん種を2国間で見ると、1位が乳がん、2位が大腸がんが共通している。一方日本では胃がんが3位に位置し、米国と大きく異なる。食道がんも日本では上位15種に入るが、米国ではこれらは上位15がん種に入らず、

上部消化器がんに関する日米間の大きな違いが見られた。患者数の規模は異なるものの、日米共通して患者数が上位の乳がん、大腸がん、前立腺がんは、両国にとって共通の課題であることが示された結果といえる。

上位20疾患 (全疾患中)



上位15がん種



出典:

- 推計患者数: 医師データベース *PatientsMap*™; 社会情報サービスとエムスリー共同開発のデータベースで、日米27,000人の医師から回答を得て、診療患者数、メーカーの訪問有無などを把握している
- 米国医師統計: *American Medical Association*; 米国医師の特性、分布
- 日本医師統計: 厚生労働省; 医師、歯科医、薬剤師調査

がんを治療する医師

各がん種について、医師の診療科の割合を、乳がん、前立腺がん、肺がんについてみたところ、米国では腫瘍内科（オンコロジスト）と放射線科が多くを占め、日本は各臓器の専門医が関わっているという違いが明確に現れた。

診療科別患者分布

(単位: 患者割合)

